

「ロンドン劇場における「イギリス性」と「バーレスク」
～《ウォントリーのドラゴン *The Dragon of Wantley*》を例として～」
松本直美

ジョン・F・ランペ作曲、ヘンリー・ケイリー台本のオペラ《ウォントリーのドラゴン》(1737)は波乱に富んだ上演史を辿ったものの18世紀イギリスの最も成功した音楽劇のひとつとなった。本稿は、現在では殆ど省みられないこの作品に焦点を当て、作品が属する「バーレスク」という分野の定義を試みると共にこの作品が具現しようとしている「イギリス性」という概念について考察するものである。

ここでは先ず、台本の詳細な吟味からその文化・社会的背景を探り、その風刺を解釈する。その中でこの作品の主題である「竜成敗譚」がイギリスの国民精神に密着するものであったこと、作品の下敷きとなった《ムーアホールのムーアとウォントリーのドラゴンの熾烈な戦いの真説》などの俗謡が外来文化への反駁の中でイギリスの文化遺産として再評価されつつあったことなどから本作品が当時の聴衆に特にイギリス的と捉えられたことを論じる。

以上を踏まえた上で行なう音楽分析では、本作品の真髓が意図的に卑俗化された台本に芸術的音楽を組み合わせるといふ不調和にあり、作曲者ランペはオペラセリア様式に則って当時確立されていた登場人物の品格と楽曲構造の結合を逆手に利用することによって劇作に寄与していたことを論証する。

結論として、本稿は、この作品を例とする「バーレスク」を「パロディー」や「風刺」など混同されやすい類似の分野と区別して「高・低級様式 **High and Low Art** の意図的な混合と操作」と定義する。そして、この手法がいかにかに18世紀初頭ロンドンの社会的構造と密着するものであったかを問う。これは翻って、我々の「高級・低級様式」を相容れない二分法とする認識に一石を投じようとするものである。